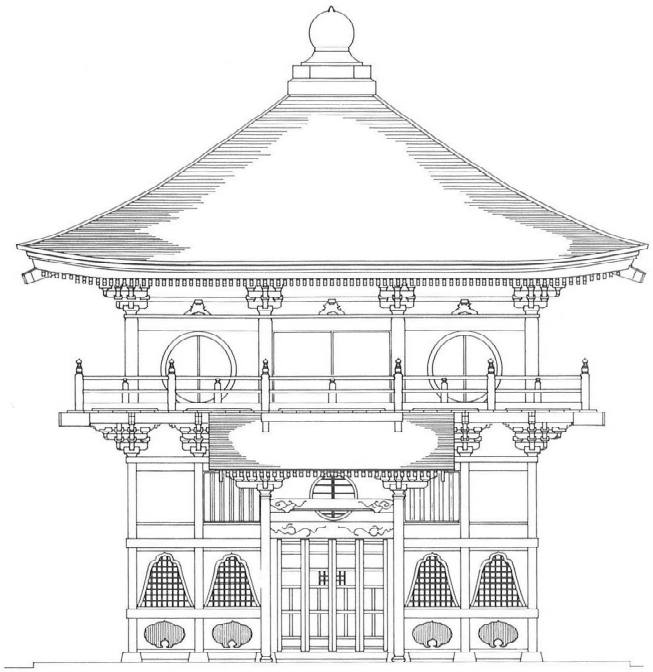
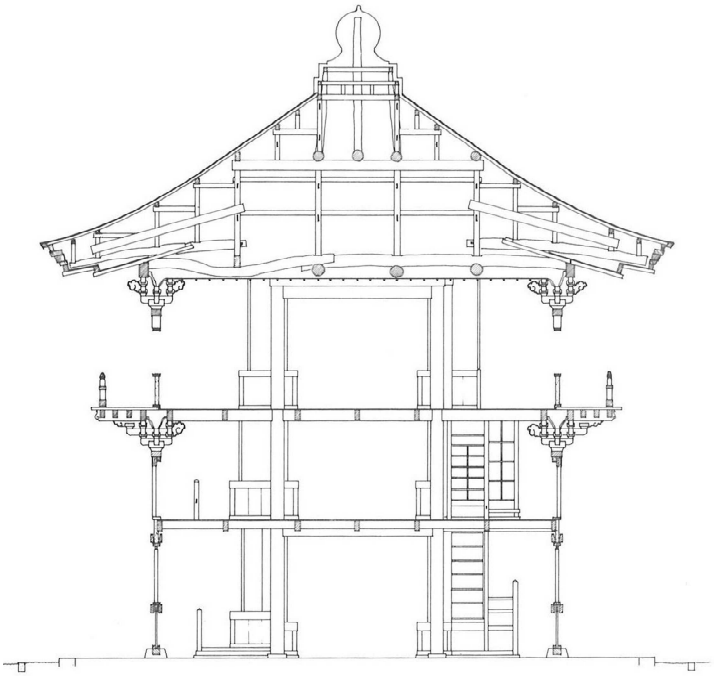
茨城県指定有形文化財

長禅寺三世堂





取手市教育委員会

大鹿山長禅寺

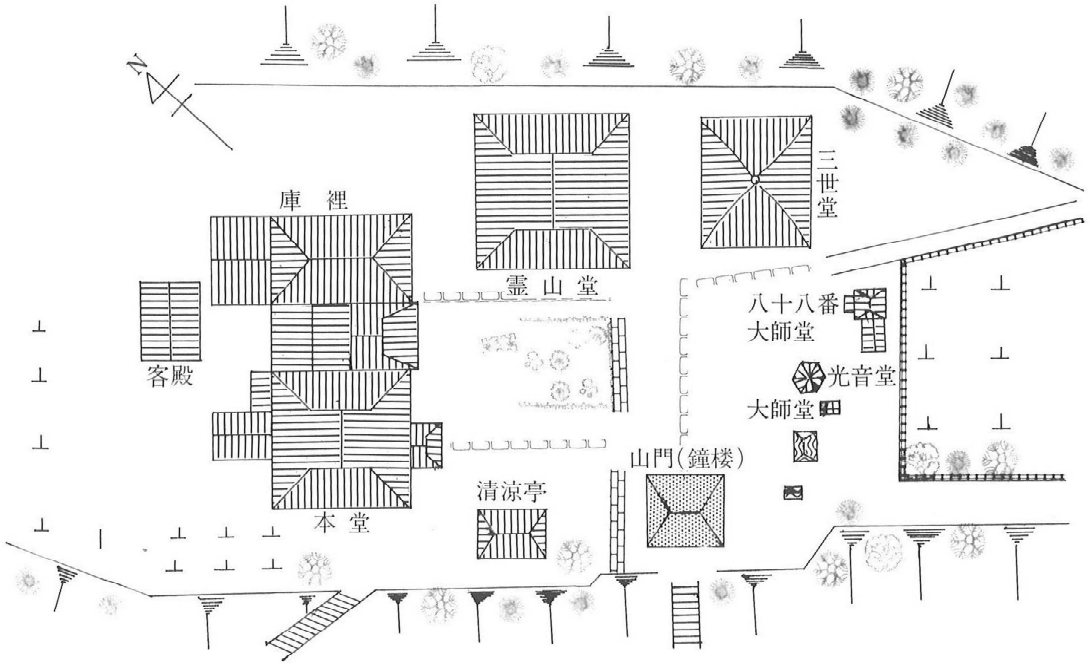
大鹿山長禅寺と号し、臨済宗妙心寺派に属しており、朱雀天皇の代の承平元年（９３１）に「平新皇将門相馬小次郎」が勅願所として創建したと伝えられています。将門の没後は、「御厨三郎吉秀」という人物がひそかに守本尊の十一面観音像を伝えましたが、荒廃が甚だしかったと言われています。それを承久元年（１２１９）には義門和尚を開祖として再興を計り、さらに「吉秀後胤織部時平」なる人物が、文暦元年（１２３４）に「四間四面御堂」を再建したと伝えられています。江戸時代に入ると、慶安２年（１６４９）８月２４日付で３代将軍徳川家光より寺領５石３斗を賜る朱印状の交付を受け、以後明治維新まで歴代の将軍より朱印状を受けています。市街地の中にありながら境内は深山幽谷の趣を有し、本堂・山門・庫裏・三世堂・地蔵堂などの多くの堂宇を有し、また市内数多くの石造遺物がここにあります。

三 世 堂

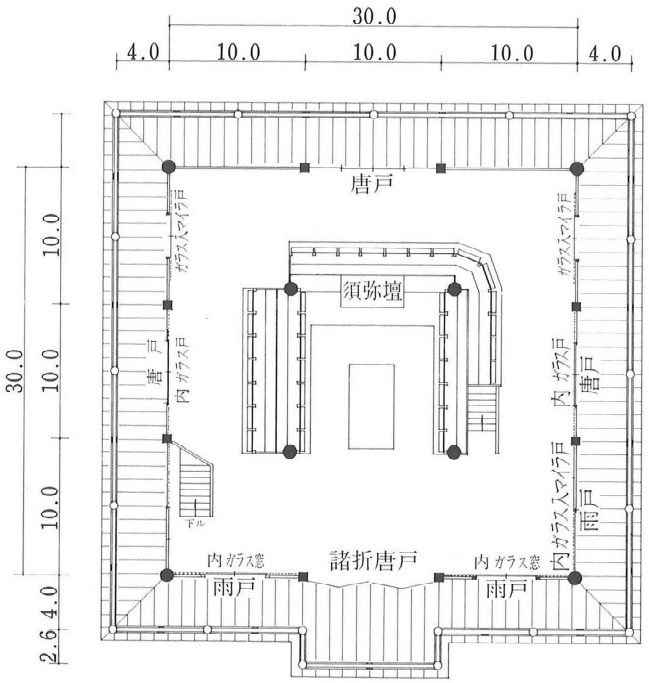
南側の石段をのぼり山門をくぐると、正面に建つのが茨城県指定文化財の三世堂です。外観は２層ですが内部は３層で、１層目には坂東三十三か所観音札所、２層目には秩父三十四か所観音札所、３層目には西国三十三か所の各本尊の写しを安置しています。合計百体の観音像を安置することから、百観音堂とも呼ばれています。

内部は「さざえ堂」の形式になっており、上り専用の階段と下り専用の階段があり、順路にそって進めば堂内では参拝者が交差せずにまわれるようになっていて、その構造の巧みなことには驚くばかりです。棟札などによれば、宝暦１３年（１７６３）に建立された堂が大破したため、享和元年（１８０１）に再建されたとあります。建築の様式や手法から見ると享和元年の新築の建物と推定されますが、一部には宝暦建立時の部材が使用されているようです。平成１６年１月８日に茨城県指定有形文化財に指定されています。

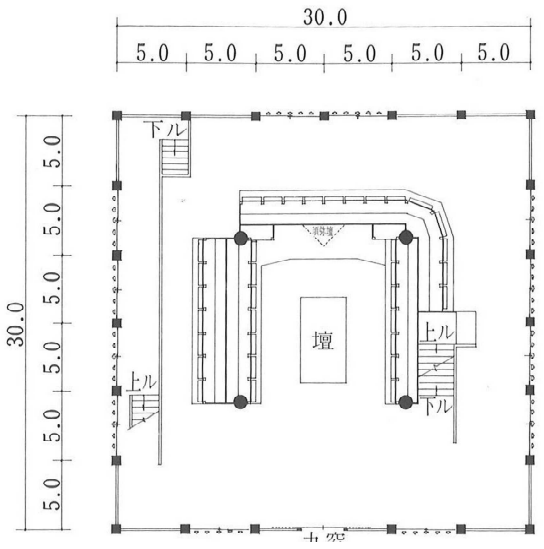
さざえ堂は他には、群馬県太田市の曹源寺、埼玉県本庄市の成身院、福島県会津若松市の旧正宗寺、青森県弘前市の蘭庭院、長崎県島原市の天如搭と、長禅寺のものを含めて全国でも６棟しか残っておらず、大変に貴重な建物です。なおここでのさざえ堂とは、日本古来の木造建築であり、内部は参拝者の流れが交差せずにまわれる寺院の仏堂をさしています。



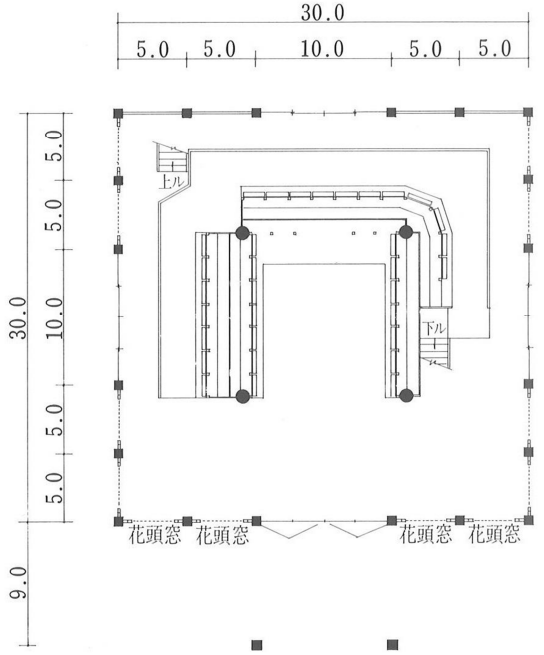
長禅寺境内図（『取手市史』社寺編より）



長禅寺三世堂三層平面図
（単位：尺）



長禅寺三世堂二層平面図
（単位：尺）



長禅寺三世堂一層平面図
（単位：尺）
（『取手市史』社寺編より）

家庭小説の第一人者菊池幽芳と三世堂

「己が罪」・「乳姉妹」などの新聞小説・家庭小説で一世を風靡した菊池幽芳は、水戸中学校の卒業後、取手高等小学校の教師となり、この地で下宿生活を送りました。幽芳は、下宿屋のとなりの染物屋の娘さんと親しくなり、明治２４年（１８９１）３月に婚約しました。この時幽芳は数え年で２２歳、相手の杉浦玉枝は１７歳でした。

同年の８月、幽芳は大阪毎日新聞社編集局に入社しています。取手を離れ大阪に赴任することになった幽芳は、婚約者と長禅寺の三世堂にのぼりました。日はまさに西に落ちんとし、利根川の水は金色に輝き、また富士山がくっきりと見える中で、二人はしばしの別れを惜しんだのです。後に幽芳は玉枝と結婚し、終生恵まれた夫婦生活を送りました。

小林一茶の句碑

境内に立つ高さ約１メートル余の自然石の碑です。「下総の　四国廻や　閑古鳥」の句が刻まれています。小林一茶は江戸時代後期の俳人で、現利根町の布川や現守谷市にある西林寺をしばしば訪ねていることから、取手にも立ち寄ったと考えられています。なお文字は小川芋銭の筆になります。

小川芋銭先生景慕之碑

河童の絵で有名な小川芋銭は、画家であるとともに和歌や俳句もたしなむ文人でした。取手の「水月会」の句会に参加したのが、取手とのつながりができたはじまりといわれています。またここ長禅寺でもしばしば画会を開きました。碑の表面のは高村光太郎の筆になります。光太郎も何度か取手を訪ね、「利根川の美しさは空間の美である」との名言を残しています。妻智恵子の看病をした姪で看護婦の春子が、取手の宮崎稔と結婚しています。稔の父の仁十郎は、芋銭や光太郎と親しく交際しており、碑の裏面の文章は仁十郎が書いています。

小林一茶の句碑

小川芋銭先生景慕之碑

小川芋銭の命名による清涼亭

取手市埋蔵文化財センター
〒302－0007　取手市吉田３８３
TEL　０２９７－７３－２０１０　　FAX　０２９７－７３－５００３